

第五号の56から最後の88までをまとめてみたい。

「高い山にいるような支配層から、人々が行き交う広々とした道をつける。親神の方ではその為の準備をしているが、そばにいる人間は何も知らないだろう。つまり、ここへ『警察へ出頭せよ』と呼びにくるのも、あるいは警官などが直接のりこんで来るのも、全て神の深い思惑があつてのことであり、決して世間一般と同じような考え方で捉えてはいけない(56～61)。

親神が『この世界創めて以来の根元の真実を教えてやりたい』とどれほど心急いでいても、人間たちはうっかりとした気持ちでそれに取り合わない。なぜ根本を究めようとししないのか。この道を根本から通り抜けたなら、上に立つ者も下の者も皆の心が勇み立ってくるのに(62～68)。どんなことでも世界中へ教えてやりたいのだが、人間はその神の深い思惑を知らずに、神のする事を何か危ないことのように思っている。何であれ、親神のいうことに危ないことがあるはずがない(69～72)。

親神の言うことを素直に受け取れるように、どうか人間の心を澄ませる準備に取り掛かってくれ。世界中の事であるから、すべての人間の心を澄ますのは大変難しいであろう。しかし、どれほど難しくとも各々が自分の心を通して真実を見よ。心が澄んで、親神の思いが分かってくると、そのまま直ちに真実が見えるようになる(73～77)。日々変わりなく人間を護っている親神の働きを知っている者は誰もいないだろう。どんなに目覚ましいことでも、すべて親神がしているのである(78～80)。

今までは混然としていたが、だんだんと細い道が見えており、その道を慕い行くなら必ず向こうに本道が見えてくる。いかに人間の知恵や力が偉いといっても、これからは親神の教えを聞き分けた者がそれに負けることはない。さあ、この世界の根本の真実を究めさせよう。力の限りその根を掘り切ってみよ。根本さえ確かに会得できたなら、どんな者でもこれには太刀打ちできない。よく聞け。口で何を言っても、あるいは心で思っても、この道に邪魔立てする者はどこの者であっても直ぐに親神の守護が退いてしまうから、そのことをよく承知しておけ(81～88)。」

当連載の最も大きな課題の一つは「おふでさき」をどう読むかであるが、その親心を受け取れるかどうかは、結局、日頃自分が親神にどのように向き合っているのかに拠っている。しばしば教えを「人を責める道具」に使ってはいけないと諭されるが、“自分の正しさ”を主張したいという情念を抱いたままで「おふでさき」を読むと、その内容を知れば知るほど、持論を支える根拠としての情報量は増えていくが、どこまでいってもそれは結局“相手が間違っている”ことを示すものとして用いられる。

周りの信仰者に比べると、私は、人並み以上に「おふでさき」を読み、教理書にも通じているだろう。もちろん専門の先生方に比べるとまだまだ不十分であるが、天理教について知っている事柄は平均以上だと思う。そうすると、自分の言っていることが周りの人よりも「正しい」と思えてくる。それは、つまり、私が人の価値をはかる基準として“知識”や“理解”を採用しているということである。もちろん、知識が増えることや理解

が深まることは悪いことではない。しかし、その“持論に頼る心”が人の価値を貶めてしまうのだ。そして、それは周りの人だけに限らず、自分が自分自身の価値をどのように認めているかにも関わってくる。というのも、知識という物差しに頼っているかぎり、天理教について何か勉強しなければ自分の存在が認められず、それだけで信仰している気にもなるからだ。そうすると「おふでさき」を読めば読むほど知識は増えるかもしれないが、その“親心”からは遠のいていくような気持ちになる。

さて、このような私の「親心から遠のく心」のあり方を、「おふでさき」の「から」という言葉で捉えてみたらどうか。その反対に、「親心に近づく心」が「にほん」。今回は、このようなイメージで、84を「いかに人間の知恵や力が偉いといっても、これからは親神の教えを聞き分けた者がそれに負けることはない」と意識してみた。したがって、ここでの「負ける」という言葉は、自分の「正しさ」を主張するという意味での勝ち負けを表しているのではなく、心のありようを示している。実際、「正しさ」で負ける場合、頭ではそれが理解できても心で納得できないことは多々あるだろう。

しかし、私はそのことが分からずに、戸別訪問に歩いても、相手にどこか天理教の正しさを押し付けているように思う。そして、自分自身に対しても「もっと正しくあらねば」と頭ごなしに叱咤しては自分に「信仰する」ことを求め、心を疲弊させているのかもしれない。

では、私はどのようにして親心に近づいていけばいいのか。一つ前の83は、「これまでに人間が通ってきた道では、『から』も『にほん』も分らない」と、親心に近づくも遠のくもそもそも親神の心の存在が明かされていなかったことを詠い、さらに前の81・82で「今までは混然としていたが、だんだんと細い道が見えており、その道を慕い行くなら必ず向こうに本道が見えてくる」と、親心に近づく歩みを“慕い行く”と表現している。つまり、親神の心も何も分からない段階では自分というものの捉え方も混然としており、人を認める尺度として知識などに頼っては、自分の存在証明として持論の「正しさ」を主張したりする。あるいは力、才能、関係、お金など様々な尺度で自分を捉えてもみるだろう。

ところが、教祖によって親神の親心が明らかにされ、それに近づく道が示されると私たちはその心を“慕う”ことができ、人は「神を慕う存在」として認められる。つまり、たとえ知識が足りなくとも、教理の理解が曖昧でも、相手の言い分のほうが正しくとも、神を慕うことができるという点で自分の存在価値は認められるのだ。

実際、世間の人の方が私よりも言っていることが正しいことは多々ある。しかし、持論が正しいこととその心が救われていることは別問題であり、教祖を慕いながら布教に歩けるようになってきた最近では、たとえ自分が間違っている相手も相手の言い分にも耳を貸しながら素直に頭を下げられるようになってきた。しかし、それにしても自分の持論の正しさを主張したいという情念のいかに強いことか。教祖を慕う気持ちがそれに“負けない”ように教えを聞き分けていきたい。